

恩田守雄著

『開発社会学——理論と実践——』

ミネルヴァ書房 2001年 xiii+439ページ

きとうひろし
佐藤 寛

本書は、日本で初めて「開発社会学」を名乗る記念すべき書である。小倉充夫が1982年に『発展と開発の社会学』を著したとき、日本国内の地域開発と混同されるので「開発社会学」はタイトルとして適切でない、と言われたという。それから20年を経たついにこのタイトルを冠する本が登場したことは、まことに喜ばしい。これまで日本で「開発社会学」は学問分野として認知されてこなかったのである。その一方で「開発」の現場では「社会開発の内容が学問的にあいまいなまま、実務レベルでの取り組みが先行して」（1ページ）いる。この面からも「社会開発を社会学から基礎づける開発社会学」（1ページ）が必要なのだという認識を共有する者として、「開発社会学」の旗を掲げた著者の勇気を称えたい。

全7章26節412ページの内容は広範にわたる。各章のタイトルをあげれば、第1章「開発社会学とは何か」、第2章「社会開発の歴史と社会開発論の系譜」、第3章「開発社会学の理論」、第4章「応用開発社会学」、第5章「発展途上国の社会開発」、第6章「日本の社会開発」、第7章「国際協力と『地球市民社会』の実現」。第2章と第6章は著者の綿密なサーベイが生きておりインフォーマティブである。しかし途上国の「社会開発」に関するほとんどすべてのテーマと関連事項を網羅しようとするために、未消化な概念も散見され、章ごとの内容に精粗があることはやむを得まい。とはいえ「開発社会学」と「社会開発」の関係については今少し安定的な定義が欲しいところである。

著者によれば「社会開発は……実践的には生活基盤整備というハード面、コミュニティ開発というソフト面、人間開発というヒューマン面が相互に結びついた三位一体で進められる」（150ページ）という。この「社会開発の三位一体説」が本書を通底する最

も重要な主張であり、本書のサブタイトルである「理論と実践」が最も具体的に絡み合っている部分である。しかしながら「進められる」とは「進められるべきである」という著者の期待を述べているのか、「現実に進められている」という分析結果を述べているのかが必ずしも明確ではない。同様に「開発社会学はそのグローバルなコミュニティ開発によって、究極的には地球レベルの市民社会である『地球コミュニティ』の実現を政策理念としてもっている」（403ページ）というような記述も多い。これは「持つべきである」という客観的、論理的な必然性を述べているのか、それとも「著者の」開発社会学に対する主観的な理念を述べているのか、が判然としない。もちろん「地球市民社会の実現」を目指そうとする著者の熱い想いは一個人としては尊敬できる。しかしながら、それが学問としての「開発社会学」と渾然一体となって語られるのは、せっかく産声を上げたばかりの開発社会学の間口をせばめることになりはすまいか。世界観や理想像を共有しない者同士であっても、共通の土俵に立った意見交換を可能とするような分析枠組みを提示することが開発社会「学」には求められるのではないだろうか。

もとより、そうした「学の客観性」信奉は「西洋近代主義」の産物だという指摘はありえようが、著者は「開発社会学」を「いかに近代化を進めるか」の学として捉えている（「新しい社会システムの創造は、伝統的な共同体を近代的なコミュニティに変えることである」（111ページ）など）のであるから、理念と分析の混同は近代主義者としての著者の選ぶところではないはずである。このように理念と分析が渾然一体となった記述は「参加型開発」、「エンパワメント」などの重要な概念に関しても見られる。もちろん私自身「机上の空論」に終始することが「開発社会学」の目指すべきところとは思っていない。しかしながら、「社会を開発するということは、どういうことなのか」を考える作業と「社会を開発することを目指す」（91ページ）作業とは、混同されてはならないだろう。日本の開発社会学の泰斗たる著者の、今後の研究の深化に期待したい。

（アジア経済研究所経済協力研究部主任研究員）